

日本における宗教性の諸相とその構造*

——「世界価値観調査」のデータ分析——

真 鍋 一 史**

I. はじめに

本稿は、「世界価値観調査 (World Values Survey: WVS)」のデータ分析をとおして、日本における宗教性 (religiosity) の構造を明らかにするとともに、日本における宗教性がどのような諸要素で適切に構成されるかを探ろうとする試みである。はじめに、本稿のテーマに関して、若干の説明をしておきたい。それは、本稿のテーマをめぐる (1) What? (2) Why? (3) How? という「問い」に答えるということである。

1. まず、ここでの「宗教性の構造」という用語が何を意味しているかということである。本稿では、「世界価値観調査」のデータ分析をとおして、「宗教性の構造」というテーマにアプローチを試みる。いうまでもなく、「世界価値観調査」は、質問紙法にもとづく大規模な国際比較調査の代表的なもの1つであり、比較的多くの「宗教性」に関する質問項目を含んでいる。このような調査データを用いて「宗教性の構造」という問題にアプローチする場合、それは「そのような調査の質問諸項目に対する人びとの諸回答の相互間の関係のパターン」ということを意味する。

2. では、なぜ、このような「宗教性の構造」というところに焦点を合わせるかということ、この点については、いくつかの理由をあげることができる。

(1) 宗教性を捉えよう (測定しよう) として作成されたさまざまな質問諸項目間に、どのような関係が見られるかということは、それだけで、宗教性の探究をめざす研究者の関心を引くテーマといえることができる。それは「素朴な関心」のレベルともいべきものである。

(2) このような関心は、さらにつぎのような方向をとる。それは「国際比較」という方向であり、さまざまな国において、宗教性にはどのような「類似点」と「相違点」が見られるであろうかという「問い」を立て、それに対して、そのような「宗教性」という概念を構成する諸要素——質問諸項目——の相互間の関係が、国ごとにどのようなになっているのであろうかといったところに照準を合わせて、その「答え」を実証的に探っていくという方向である。それを、ここでは、「国際比較への関心」と呼んでおきたい。

(3) このような「国際比較への関心」は、さらに方法論的に深められていくことになる。欧米の宗教社会学においては、宗教性という用語について、その「概念化 (conceptualization)」と「操作化 (operationalization)」をめぐる、さまざまな理論的・実証的な試みがなされ、その成果が「累積的な知 (cumulative knowledge) の蓄積」(Blalock, 1989) という形で整理されてきた。そのような文献の1つとして、P. C. Hill and R. W. Hood, Jr. (1999). *Measures of Religiosity*. Religious Education Press をあげることができる。

このような研究の蓄積から、欧米のキリスト教

*キーワード：宗教性の構造、「世界価値観調査」データ分析、相関マトリックス、因子分析、クロンバックの α 係数

**関西学院大学名誉教授、青山学院大学地球社会共生学部教授

社会における宗教性は、一方で、「次元の細分化」の試みをとおして、それが「多次元」的なものとして捉えられるようになるとともに、他方で、そのような「次元の細分化」の試みにもかかわらず、それら諸次元間の相関関係は、その「大きさ (size)」を示す数値が小さくなることはあるにしても、その関係の方向を示す「符号 (sign)」がマイナスになることはないことから、そのように細分化された諸次元も同じ宗教性という内容を持つものであることに違いはなく、そうであるならば、宗教性は「一次元」的なものとして捉えられるものでもあるとされてきた。

まず、前者の方向に関して、例えば、Glock と Stark (1965) は、宗教性をつぎの5つの次元に区別した。

- ①宗教的信念 (religious belief)
- ②宗教的实践 (religious practice)
- ③宗教的知識 (religious knowledge)
- ④宗教的経験 (religious experience)
- ⑤道徳的結果 (moral consequence)

つぎに、後者の方向に関しては、その後、とくに「宗教的信念」と「宗教的实践」に焦点を合わせて、さまざまな実証的な研究が行なわれ、それをとおして、つぎのような知見 (findings) が導かれることになった。それは、キリスト教のさまざまな「教義 (dogma)」や「教理 (doctrine)」を信じるといった「宗教的信念」の質問諸項目と、「礼拝への出席」や「祈り」を絶やさないといった「宗教的实践」の質問諸項目からは、1つの信頼性 (reliability) の高い「測度 (measure)・指数 (index)・尺度 (scale)」が構成されるというものである。このような知見は、欧米のキリスト教社会において繰り返し確認 (confirm) されてきたものである。そして、そうであるならば、そのような知見は、非キリスト教社会の日本においては、確認できないものなのであろうかという「問い」が出てくることになる。それは、国際比較の視座からする「宗教性の測定の等価性 (equivalence)」への「方法論的な関心」というものである。

3. 最後に、では、このような「宗教性の構造」をめぐる方法論的な問題に、本稿ではどのようにアプローチしていくかということについて述べて

おかなければならない。

(1) 以上のような問題関心に対して、実証的に答えるためには、データが必要となる。本稿では、「世界価値観調査」の最も新しい「第6回日本調査 (2010年11月・12月)」の「二次分析 (secondary analysis)」という形で、ここでの方法論的な問題にアプローチしていく。

(2) 「二次分析」の具体的な手順は、以下のとおりである。

①「第6回世界価値観調査」の日本語版調査票「国民の意識に関する国際比較調査」から、人びとの宗教性に関する質問諸項目を抽出する。

②それら質問項目の1つ1つと、欧米の宗教社会学における「宗教性の概念を構成する諸要素」との対応関係を確認する。

③その上で、それら諸項目の相互間の関係の構造を「相関マトリックス」「因子分析」「クロンバックの α 係数」などの統計的技法を用いて検討する。

II. データ分析の準備作業

1. 「日本における宗教性の構造」というテーマについてのデータ分析の準備作業の第1は、調査票 (質問紙) から宗教性に関する質問諸項目を抽出するという作業である。ここで、「関する」というのは、文字どおり「関する」であって、どのような意味においても、宗教性ということに「関わる」と考えられる質問諸項目を広く抽出する。こうして、広く宗教性に関わる質問諸項目を選び出し、その上で、それらを substantive、そして methodological な視座から詳細に検討するという方略をとるのである。

2. このような substantive、そして methodological な視座において、重要な位置を占めるのが、欧米の宗教社会学の領域における宗教性という概念を構成する諸要素についての「概念化」と「操作化」の試みの蓄積である。こうして、上述の質問諸項目の1つ1つが、欧米の宗教社会学における「宗教性を構成する諸要素」のどれに対応するものであるかを確認していく。

しかし、ここでは、そのような確認作業の結果

を示すに先立って、そもそもこのような確認作業をするに到った筆者の方法論的な立場について、説明しておかなければならない。

日本の宗教社会学においては、これまで、欧米の「概念・仮説・理論」や「測度・指数・尺度」で、日本の宗教現象を捉えることはむつかしいという考え方が主流であり、そのような方法論的な立場に立って、日本独自の宗教現象の観察・測定・分析と、それにもとづく宗教理論——その代表的なものとして「宗教類型論」など——の構築が進められてきた（川端、2016を参照）。そして、そのような研究の志向性の結果として、欧米の宗教社会学の「知の蓄積」については、日本の宗教的現実を踏まえた検討、批判、受容が、いまだ十分になされてきていないといわざるをえない。

しかし、このような研究の志向性は、何も日本の宗教社会学の領域に限られるものではない。従来の欧米社会科学の優位性への批判から、それをすべて否定しようとする方法論的な立場さえ登場してきた。例えば、米国スタンフォード大学のH. Befu (2006) は、そのような例として、A. G. Frank の *ReORIENT: Global Economy in the Asia Age*, Berkley: University of California Press, 1998 をあげている。つまり、Frank は、「欧米の社会学は M. Weber や K. Marx から現代の理論にいたるまですべて間違っている。これまでの考え方を反省し、アジアに焦点を当てて理論の再構築をしなければならない」というのである。

しかし、このような立場も、cumulative knowledge という視座からするならば、決して生産的なものとはいえないであろう。

筆者は、欧米の宗教社会学の諸成果の日本の宗教現象への適用という点においては、いわゆる単純な「all or nothing」の立場は取らない。むしろ欧米社会学の諸成果を、国際比較の視座から実証的に再検討することをとおして、より有効なものにしていくという行き方をとる。以下のような指摘も、ここでの行き方と同じ線上にあるものといえよう。

「交差国家的調査の1つの方法論的利点は、1つの国家を扱っているときには無視される可能性のある多くの問題に直面しなければならない

ということである。交差国家研究によって概念(変数)の再検討と明確化が促されるとともに、等価性の問題も慎重に吟味されることになる」(Almond and Verba, 1963=1973)。

こうして、国際比較調査の出現という社会科学上の大きな出来事を契機として、欧米の宗教社会学の諸成果を、日本の宗教現象に照準を合わせながら、国際比較の視座から、実証的に再検討するという知的営為の新しい流れが出てくることになるのである。本稿の問題関心とその具体的な方略は、このような斯学の研究の系譜に鑑みて提案されるものである。

さて、以上のような方法論的な立場に立ってなされた、「第6回世界価値観調査」の調査票（日本語版）から抽出された質問項目と、欧米の宗教社会学における「宗教性という概念を構成する諸要素」との対応関係の確認結果を表1に示す。なお、ここでの「宗教性という概念の構成要素」については、主として R. Stark and R. Finke (2000). *Acts of Faith: Explaining the Human Side of Religion*. University of California Press を参照した。

3. データ分析のための準備作業は、以上の1と2の作業につけるわけではない。以下の統計的なデータ分析のために、いくつかしておかなければならない準備作業がある。それは、「データ」が、以下の統計的分析に耐えうるものであるかどうかの検討ということである。この点からする検討の第1は、それぞれの質問項目に対して「わからない」と答えた回答者の%の検討である。表1の右端の欄に示したその%の結果からするならば、以下の質問諸項目については、「わからない」という回答者が30%を越え、相対的に高いものとなっていることがわかる。

問 35 自分とは異なる宗教の人を信用するか (39%)

問 47① 神の存在を信じるか (31%)

問 47② 地獄の存在を信じるか (40%)

問 48 } 宗教の意義を「2項対立」の形 { (49%)
問 49 } で尋ねた質問項目 { (43%)

表1 「宗教性に関する質問項目」と「宗教性の構成要素」との対応表、そしてDKの%

宗教性に関する質問項目	宗教性の構成要素	DKの%
問1 生活にとって重要：(F) 宗教	Importance of Religion (Religious Commitment)	14%
問5 家庭で子どもに身につけさせる大切なもの：(8) 信仰心	Importance of Religion (Religious Commitment)	非該当
問8 (A) 宗教団体への参加と活動	Religious Participation	非該当
問9 近所に住んでいてもよい人びと：(C) 宗教の異なる人びと	Religious Toleration	非該当
問35 信用する人：(E) 自分とは異なる宗教の人	Religious Trust	39%
問36 信用する組織や制度：(A) 宗教団体	Religious Trust	13%
問42 人生の意味や目的を考える頻度	Religious Behavior	5%
問43 宗教を持っている	Religious Faith	6%
問44 教会・寺・神社へ行く頻度	Religious Practice	1%
問45 祈りの頻度	Religious Practice	1%
問46 自分は信心深い	Self-Rated Religiosity	18%
問47① 神の存在を信じる	Religious Belief	31%
問47② 地獄の存在を信じる	Religious Belief	40%
問48 宗教の意義：「宗教戒律や儀式に従う」対「他人のために善行をする」	Religious Belief	49%
問49 宗教の意義：「死後を意味あるものにする」対「現世を意味あるものにする」	Religious Belief	43%
問50 生活にとって神は重要	Importance of Religion (Religious Commitment)	12%
問51 (A) 「科学と宗教が対立する場合、正しいのはいつも宗教だ」 (B) 「受け入れられる唯一の宗教は、私の信じる宗教だ」 (C) 「公立学校では、全ての宗教について教えるべきだ」 (D) 「他の宗教の信者も、恐らく私の信じる宗教の信者と同じくらい道徳的だ」	Religious Belief Religious Belief Religious Belief Religious Belief	35% 44% 40% 68%

ここでの宗教性という概念の構成要素については、主として R. Stark and R. Finke (2000). *Acts of Faith: Explaining the Human Side of Religion*. University of California Press を参照した。

問51(A) } 宗教について「ステートメン
(B) } ト・テスト」の形で尋ねた質
(C) } 問項目
(D) } (35%)
(44%)
(40%)
(68%)

ここで、それぞれの質問項目に対する「わからない」という回答の意味をどう解釈するかは、きわめて興味ぶかい検討課題であるといわなければならない。いうまでもなく、このような課題は、そのための独立した論攷において取り扱われるべきものといえよう。したがって、本稿では、これらの質問諸項目は以下の統計的なデータ分析からは除外したということを記しておくにとどめる

4. データ分析の準備のためのもう1つの作業は、以上のような質問諸項目への回答の全体像の把握

ということである。真鍋 (2016) は、このような全体像の把握の試みを、つぎのような方法によって行なった。それは、宗教性に関する質問諸項目に対する回答結果を、1つ1つの質問項目への肯定的な回答の%の「大きさ」に応じて、下層から上層へと積み上げて、ピラミッドの形で図形的に表示するというものである

因みに、以上の3の作業において、統計的なデータ分析から除外した質問諸項目は、このピラミッド図形には載せていない。

こうして、このピラミッド図形にもとづいて、日本における宗教性についての調査の回答傾向を概観するならば、「宗教を持っている人」がほぼ40%、「自分は信心深いと思っている人」がその半分のほぼ20%、そして「月に一度以上は教会・寺・神社などに行っている人」がさらにその半

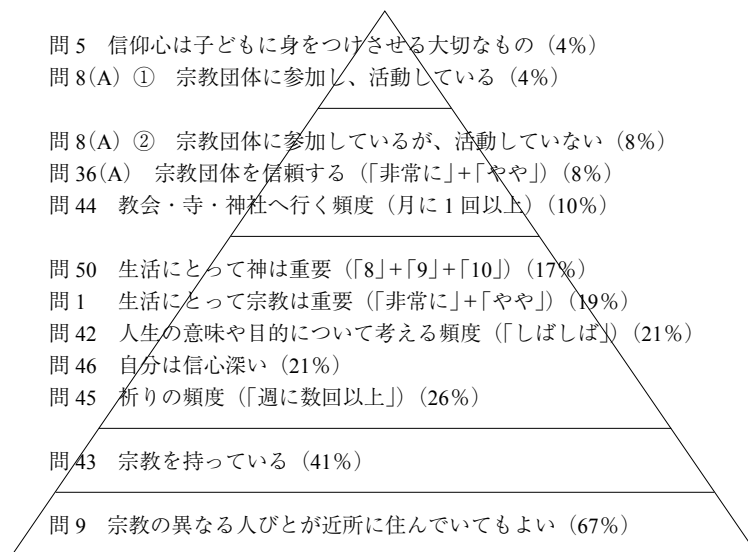


図1 日本における「宗教性」の諸相のピラミッド

分のほぼ10%という結果となっているが、それを越えて、さらに宗教性の高いレベルを示すと考えられる「宗教団体に参加し、活動している人」となると、それは4%というきわめて小さな割合となってしまふということがわかる。

以上のような結果を踏まえて、以下の統計的なデータ分析においては、このような10%未満の相対的に回答者の少ない質問項目は、取りあげないこととする。

5. 最後に、各質問項目の「意味内容」の再検討をとおして、以下の統計的なデータ分析に取りあげる質問諸項目を確定するという準備作業についても説明しておきたい。

上述のピラミッド図形に位置づけたそれぞれの質問項目については、真鍋（2016）において、「methodological な議論」とともに、「substantive な議論」を試みた。したがって、ここでは、以下のデータ分析のための準備作業という点からして、必要不可欠な記述に限定することにする。そのポイントは、「宗教性という概念の範囲をどこまでとするか」についての考え方である。この点について、より具体的に議論するために、C. Y. Glock と R. Stark（1965）の宗教性の概念構成の考え方を利用する。それによれば、宗教性という概念には、上述の5つの次元が含まれるという。

しかし、ここでの5番目の「道徳的結果」というのは、文字どおり「結果」であり、「宗教性の道徳への影響」というものである。そして、そうだとするならば、それは「宗教性」という概念そのものとは区別されるべきものとして扱うという整理の仕方もありうるであろう。

そして、このような議論の同じ線上で、「世界価値観調査」の宗教性に関する質問項目として抽出した「宗教的信頼（religious trust）」に関する質問項目（「問36（A）宗教団体を信頼するか」という質問項目）と、「宗教的寛容（religious toleration）」に関する質問項目（「問9 宗教の異なる人々は近所に住んで欲しくないか」という質問項目）、の2つについても、それらを「宗教性の概念そのもの」に含めるという扱い方と、「宗教性の概念そのもの」には含めないという扱い方、の2つがありうるであろう。

本稿では、これらは「宗教性の概念そのもの」には含めず、まず「宗教性の概念」、そしてそれにもとづく「宗教性の測度」を確定した上で、そのような意味での「宗教性」と「宗教的信頼」および「宗教的寛容」との関係の「測定・分析・解釈」に向かうという行き方をとることにする。

さらに、もう1点、「宗教性という概念の範囲をどこまでとするか」の判断をめぐって、検討し

ておかなければならない質問項目がある。それは、「問 42 人生の意味や目的について考える頻度」を尋ねた質問項目である。この質問項目を、以下の「宗教性の概念を構成する諸要素のデータ分析」で取りあげるかどうかの判断をめぐる議論は、まず、この質問項目の理論的な背景の確認から始めなければならない。

じつは、この質問項目が作成されることになった背景には、欧米の宗教社会学における宗教の変化に関する諸理論の出現があった。これらの諸理論は、(i) 世俗化 (secularization) 理論 (宗教の衰退と消滅に関する理論)、(ii) 宗教変形 (transformation) 理論 (「伝統的な宗教」にとってかわって、「新しい宗教」が出現するという理論)、(iii) 宗教市場 (market) 理論 (宗教の変化は、その「需要」によって決まるのではなく、むしろ「供給」によって決まるとする理論)、の3つにまとめられる (真鍋、2010、Jagodzinski と真鍋、2015)。ここで、(ii) の「宗教変形理論」に注目するならば、このような理論の萌芽は T. Luckman (1967=1976) にまで遡ることができる。Luckman は、宗教の変化をその社会的な「形態」の変化——つまり、宗教が「私化 (privatize)」され、「個人化 (personalize)」され、それゆえに社会的に「見えなく (invisible) なってきた」という変化——として捉えた (Luckmann, 1967=1976)。

このような宗教の「変形」についての考え方を、新しい視座からさらに展開したのが、「世界価値観調査」の主宰者 R. Inglehart であった。Inglehart は、社会の発展にともなって、人生の意味や目的について深く考えようとする人びとが増えてくるが、じつはそのような人びとは、伝統的な信仰や確立した宗教集団に背を向ける人びとであるという。このような考え方にもとづいて提案されたのが、ここでの質問項目であったのである。

そして、このような理論的背景からするならば、この質問項目で捉えられる人びとの宗教性は、Inglehart の用語でいうならば、「ポスト近代化の時代の宗教性」と呼ばれるものであり、それは「伝統的な宗教性」とは対立概念として位置づけられることになるのである (Inglehart, 1990,

1997, Norris and Inglehart, 2004)。

それは、欧米の宗教社会学においては、「宗教性」と「スピリチュアリティ」とが対立概念として位置づけられる (真鍋、2011) ということと、まさにパラレルな関係にあるといえるかもしれない。

さて、以上のような欧米の宗教社会学における理論的な背景を踏まえて、では、ここでのデータ分析の方針はどのように立てることができるであろうか。いうまでもなく、そのような方針は実証的に立てられるべきものである。そこで、「宗教性の概念をめぐるデータ分析」は、このような「ポスト近代化の時代の宗教性」を捉えるために考案された以上の質問項目と、それ以外の宗教性に関する質問諸項目——ここでの理論的な背景からするならば、「伝統的な (あるいは従来型の) 宗教性」と呼ぶことができるかもしれない質問諸項目——との「関係性」についての実証的な検討というところから始めることにする。

Ⅲ. 日本における宗教性の諸相とその構造 ——分析編——

以上において、データ分析のための「準備作業」について説明してきた。そのような「準備作業」を踏まえて、データ分析のために選ばれた質問項目は、つぎの7項目となった。

問 1 生活にとって宗教は重要か (MS、RV、OG)

問 42 人生の意味や目的について考える頻度はどのくらいか (MS、RV、OG)

問 43 宗教を持っているか (MS、OG、RC)

問 44 教会・寺・神社へ行く頻度はどのくらいか (MS、RV、RC)

問 45 祈りの頻度はどのくらいか (MS、RV、RC)

問 46 自分は信心深いか (MS、RV、OG)

問 50 生活にとって神は重要か (MS、OG、RC)

以下においては、これら7項目を用いて、宗教

性という概念を構成する諸要素の確定のためのデータ分析を行なう。このようなデータ分析の「目標・目的・ねらい」の説明については、以下のような、それぞれいくらか異なる表現の仕方をとることが可能であろう。それらは、

・宗教性という概念を構成する諸要素間の関係の分析

・宗教性という概念についての測定モデル (measurement model) の確認

・宗教性という概念についての測度・指数・尺度の構成の可能性の確認

・宗教性の構造の分析

などといった表現である。そして、これらの表現の違いは、データ分析の焦点の置き方の違いを示しているものの、それによって実際のデータ分析の技法に違いが出てくるわけではない。本稿では、このような異なる表現の形は、相互交換的に利用可能なものとして理解しておきたい。

この点について確認した上で、ここで用いる質問項目の「取り扱い」については、つぎの3つの作業がなされる。

それは、

①「わからない」という回答の選択肢について「欠損値」(missing values) の指定を行なう、

②選択肢の「ランク・オーダー (rank order)」の「反転 (reverse)」——質問項目ごとに宗教性のレベルについて「低い」から「高い」への反転——を行なう、

③いくつかの選択肢を1つの選択肢にひとまとめにする「リコード」を行なう、という3種類の作業である。

上記のデータ分析で用いる7つの質問項目の後の()内に、MS、RV、RC、OGの4種類の記号を記した。MSは「欠損値」の指定をしたということ、RVはランク・オーダーの「反転」をしたということ、RCは「リコード」をしたということ、そして、OGは「反転」あるいは「リコード」をしていないということ、をそれぞれ意味している。ここで、「リコード」した質問項目については、それがどのような「リコード」の仕方であったかを以下に示しておく。

問 43 宗教をもっているか

- | | | | |
|------------------------|---------|----------|---------|
| 0 持っていない | } | 0 持っていない | |
| 1 キリシト教
(ローマ・カトリック) | | } | 1 持っている |
| 2 キリシト教
(プロテスタント) | | | |
| 3 キリシト教
(その他) | | | |
| 4 ユダヤ教 | | | |
| 5 イスラム教 | | | |
| 6 ヒンズー教 | | | |
| 7 仏教 | | | |
| 8 その他の宗教
(具体的に) | | | |
| 9 わからない | 9 わからない | | |

問 44 教会・寺・神社へ行く頻度はどのくらいか

- | | | |
|------------|---|-----------|
| 1 週に2回以上 | } | 4 月に1回以上 |
| 2 週に1回 | | |
| 3 月に1回 | | |
| 4 特別な日のみ | } | 3 特別な場合のみ |
| 5 年に1回 | | |
| 6 ほとんど行かない | } | 2 年に1回以下 |
| 7 全く行かない | | |
| | | 1 全く行かない |

問 45 祈りの頻度はどのくらいか

- | | | |
|--------------------|---|-----------|
| 1 1日に数回 | } | 4 週に数回以上 |
| 2 1日に1回 | | |
| 3 週に数回 | | |
| 4 宗教行事に参加
する時だけ | } | 3 特別な場合のみ |
| 5 特別な日のみ | | |
| 6 1年に1回 | } | 2 年に1回以下 |
| 7 ほとんどしない | | |
| 8 全くしない | | 1 全くしない |

以上のような質問項目の「取り扱い」にもとづいて、宗教性という概念を構成する諸要素の確定のデータ分析に取りかかることになる。そして、そのさいの第1の課題が、「問 42 人生の意味や目的について考える頻度はどのくらいか」という質問項目を、以下のデータ分析に含めるかどうかの検討である。この判断のために、「問 42」と

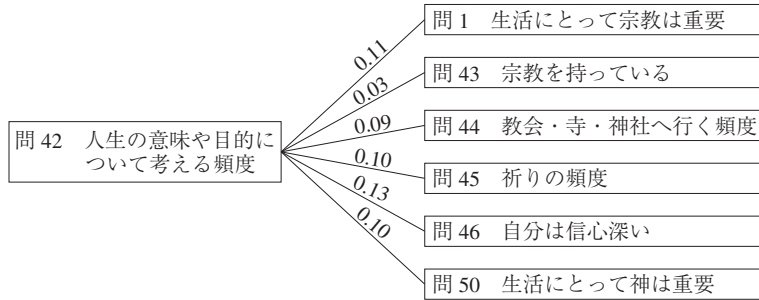


図2 「人生の意味や目的を考える頻度」と「それ以外の宗教性の諸項目」との相関関係

表2 「問 43 宗教を持っている」と「問 42 人生の意味や目的について考える頻度」との関係

			問 42 人生の意味や目的について考えること			合計
			ある	ない	わからない	
問 43 B 宗教を	持っている	度数	816	135	38	989
		行%	82.5%	13.7%	3.8%	100.0%
		列%	42.1%	35.7%	29.5%	40.5%
持っている	持っていない	度数	1041	223	37	1301
		行%	80.0%	17.1%	2.8%	100.0%
		列%	53.8%	59.0%	28.7%	53.3%
持っている	わからない	度数	79	20	54	153
		行%	51.6%	13.1%	35.3%	100.0%
		列%	4.1%	5.3%	41.9%	6.3%
合計		度数	1936	378	129	2443
		行%	79.2%	15.5%	5.3%	100.0%
		列%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

「それ以外の質問諸項目」との「相関係数」を計算してみた。その結果を示したのが図2である。

相関係数の「大きさ」の判断について、「0.6を越えると“非常に高い相関”、0.3を越えると“かなり高い相関”、それ以下は“低い相関”」（鮑戸、1987）という基準を採用するならば、ここでの相関関係はいずれの場合も「低いレベル」ととどまるものであるということがいえる。

さて、以上のような結果を、より具体的に確認するために、一例として「問 42 人生の意味や目的について考える頻度」と「問 43 宗教を持っている」との関係性を「クロス集計表 (cross-tabulation)」（表2）によって検討してみた。「クロス集計表」による検討の一例として、これら2つの質問項目を取りあげたのは、前者が「ポスト近代化の時代の宗教性」、後者が「伝統的な（あるいは従来型の）宗教性」を捉えるための典型的な質問項目とされてきたものであるからにほかならない。

この結果からするならば、「宗教を持っている」という回答者の83%が「人生の意味や目的について考えることがある」と答えるのに対して、「宗教を持っていない」という回答者の80%が「人生の意味や目的について考えることがある」と答えるということ、両者の差はきわめて小さい。つまり、「宗教を持っている」「いない」にかかわらず、回答者の大多数は「人生の意味や目的について考えることがある」と答えるのである。

こうして、以上の検討から、「ポスト近代化の時代の宗教性」と、「伝統的な（あるいは従来型の）宗教性」とは、別の次元であることが示唆されたといえるのである。そして、そうであるならば、本稿では、このような「ポスト近代化の時代の宗教性」とは区別される、ここでの用語でいうならば、「伝統的な（あるいは従来型の）宗教性」を構成すると考えられる質問諸項目に限って、それらの相互間の関係の構造の分析を進めていくのが適切であると考えるのである。

1. 「相関マトリックス」による検討

本稿では、宗教性——より厳密にいうならば、「伝統的な（あるいは従来型の）宗教性」ともいふべきもの——を捉える（測定する）ための質問諸項目として、以上に述べた6項目を選び、それらの相互間の関係の構造について検討するために、「相関マトリックス」を作成した。それが表3である。ここでは、この「相関マトリックス」を、つぎの2つの段階で検討していく。

(1) 相関係数の正負の「符号 (sign)」の検討

「相関マトリックス」における項目（変数）の数を n とすると、その組み合わせの数は全部で $n(n-1)/2$ となる。ここでは n が6項目であるので、その組み合わせの数は15となる。そして、表3からするならば、これら15の相関係数の「符号」はすべてプラスとなっていることがわかる。このことは、宗教性を捉える（測定する）質問諸項目が、それぞれ相互に「排他的」であるよりも、むしろ「累積的」であることを示している。具体的にいうならば、質問項目のいずれかについての人びとの回答が肯定的なものであっても、質問項目が変われば、それは否定的なものになるかという、結果はそうではなく、ある質

問項目に肯定的であるならば、ほかの質問項目に対しても肯定的であるという傾向が見られるということである。もちろん、特定の個人についていうならば、それらが相互に「排他的」な場合もありうるであろう。ところが、回答傾向を人びとの集合現象として捉えるならば、個人の特性 (trait) は消えて、結果として、ここに見られるような「累積的」な傾向が導かれることになるのである。

社会測定の研究領域における先駆的な研究者の一人である L. Guttman は、「相関マトリックス」に観察されるこのような現象を、人間行動——質問紙調査という方法で捉えられる人間行動——の「第一の法則 (The First Law)」と呼んだ (Levy, 1994)。こうして、ここでは、宗教性を捉える質問諸項目についても、「第一の法則」が成り立つことが確認されたのである。そして、「第一の法則」が成り立つということは、そのような質問項目が同一の内容——ここでは「宗教性」という内容——を含むものである可能性が示唆されたということである。

(2) 相関係数の数値の「大きさ」の検討

表3の「相関マトリックス」の検討から、①相

表3 宗教性の質問諸項目間の関係の相関マトリックス

		問 1	問 43 B	問 44	問 45	問 46	問 50
問 1 生活にとって宗教は重要	相関係数 有意確率 (両側) 度数	1 2112					
問 43 宗教を持っている	相関係数 有意確率 (両側) 度数	.476** .000 2005	1 2290				
問 44 教会・寺・神社へ行く頻度	相関係数 有意確率 (両側) 度数	.268** .000 2092	.264** .000 2289	1 2415			
問 45 祈りの頻度	相関係数 有意確率 (両側) 度数	.445** .000 2089	.412** .000 2286	.533** .000 2410	1 2411		
問 46 自分は信心深い	相関係数 有意確率 (両側) 度数	.440** .000 1788	.313** .000 1936	.321** .000 2004	.487** .000 2004	1 2005	
問 50 生活にとって神は重要	相関係数 有意確率 (両側) 度数	.433** .000 1904	.295** .000 2033	.292** .000 2124	.446** .000 2122	.547** .000 1827	1 2148

**Correlation is significant at the 0.01 level (2-tailed). 欠損値の扱いについては pair-wise 法を用いた。

関係数の値は、0.2 台が4 ケース (27%)、0.3 台が2 ケース (13%)、0.4 台が7 ケース (47%)、0.5 台が2 ケース (13%) となっている、②相関係数の値は最も小さいものが 0.26、最も大きいものが 0.55 となっている、ことがわかる。しかし、ここで4 ケースの0.2 台の相関係数は、いずれも小数点以下第2 位を四捨五入するならば、0.3 台となるものであり、全体に相関係数の値は、「かなり大きいもの」ということができる。こうして、これらの質問諸項目が同一の内容——「宗教性」という内容——を含むものである可能性がさらに高まったといえるのである。

2. 「因子分析」による検討

以上の「相関マトリックス」による検討を踏まえて、つぎにもう1つの統計的技法による検討に移る。それは、「データ縮減 (reduction)」の技法の1つである「因子分析」の利用の試みである。

その結果は、表4のとおり、1 因子が抽出され

表4 宗教性の質問諸項目の因子分析

	因子
	第1 因子
問1 生活にとって宗教は重要	.649
問43 宗教を持っている	.555
問44 教会・寺・神社へ行く頻度	.534
問45 祈りの頻度	.774
問46 自分は信心深い	.683
問50 生活にとって神は重要	.667

Extraction Method : Principal Axis Factoring.
a. 1 factors extracted. 5 iterations required.

分析の方法

分析手法：主因子法による因子分析

欠損値の除去：リストワイズ法

軸の回転：バリマックス回転

(抽出された因子数が1のため、回転は行われなかった)

各因子によって説明される分散の%

	分散の%	累積%
第1 因子	42.089	42.089

たことを示している。そこで、この結果を、①その1 因子で全体の「分散 (variance)」の何%までが説明されるか——何%の説明力を持っているか——、②それぞれの質問項目ごとの「因子負荷量 (factor loading)」はどのくらいであるか、の2 点に焦点を合わせて検討する。

まず、①については、この1 因子によって説明される分散は42% となっている。これまでの「経験則 (a rule of thumb)」からするならば、全体の分散の40% 以上が1つの因子で説明されるというのは、かなり高いレベルであるといえることができる。

つぎに、②については、一般に、つぎのように説明される。「因子負荷量は各項目と因子との相関を表した数値であり、-1 から1 をとる。因子負荷量は0.35 から0.40 以上であると、抽出した因子とのかかわりが強いと考える」(渡邊、2012)。この基準からするならば、ここでの結果については、どの項目も抽出した因子との関わりは強いものといえる。ただ、「問43 宗教を持っている」と、「問44 教会・寺・神社へ行く頻度」の2 項目については、その値がほかの項目の場合 (0.6 台か、それ以上) とくらべて、やや低い (0.5 台) ものとなっている。確かに、この点は「相関マトリックス」についての上述の (2) の検討からも、ある程度は予測されるものであったが、それが、因子分析によってより明確に捉えられたのである。

では、この結果 (知見) は、どのように「解釈」されるであろうか。以下に、筆者の仮説的な議論を展開しておきたい。

(1) まず、「問43 宗教を持っている」という質問項目から始める。本稿においては、R. Inglehart の提案になる「ポスト近代化の時代の宗教性」の対立概念として、「伝統的な (あるいは従来型の) 宗教性」というものを設定し、その最も典型的な質問項目として「問43 宗教を持っている」を位置づけた。日本においても、宗教性の概念の中心には「いずれかの宗教を信仰する」という Religious Faith の考え方があり、それは、欧米の概念でいえば、Religious Denomination に近いものであったといえるからにはかならない。

ところが、時を経て、そのような Denomination の形態が徐々に変化してきた。それは、「特定の宗派・教団への帰属にもとづく組織化された宗教性」から「個々人の宗教的なものの見方・考え方・感じ方にもとづく拡散化された宗教性」への変化といえるかもしれない。

しかし、ことがらは、それほど単純ではない。一方では、このような宗教性の変化の側面が観察されるものの、他方では、相変わらず、宗教性ということについての人びとの考え方のなかには「特定の既成宗教への信仰」という観念が存続している。

こうして、「問 43 宗教を持っているか」という質問項目に対する回答には、少なくとも以上のような2つの異なる次元が含まれることになる。そして、まさにそのために、この質問項目の「因子負荷量」の値がやや小さくなっているというのが、筆者の仮説である。

(2) つぎに、「問 44 教会・寺・神社へ行く頻度」という質問項目について検討する。この質問項目は、欧米の宗教社会学においては、Religious Practice (宗教的実践) という概念の構成要素の1つとして位置づけられてきたものである。このような概念が構成されてきた背後には、つぎのような考え方があった。そもそも人びとの宗教的な覚醒というものは、人びとが超越的なものを「信じる」という内面の出来事から始まる。それは、Religious Belief (宗教的信念) という形をとる。そして、そのような「信念」を外に向かって表現したものこそが「実践」にはかならない。したがって、たとえ外面的な行動は同じであっても、それが「信念」という内面に裏付けられていない行動、つまり「信念」をとまなわない行動である場合は、Religious Practice とは呼ばないという考え方がそれである。

しかし、日本においては、「教義・教理」を信じるかといった「信念」よりも、初詣・葬儀・法事・祭などの慣習化された「儀礼」を大切にしてきたといわれる (柳川、1989)。その後、そこにはもう1つの新しい側面が出現することになる。それは、和辻哲郎の『古寺巡礼』(1979) に示されるような古美術鑑賞という意図・目的での神社

・仏閣への訪問などの行動が出てきたということである。加えて、もう1つの問題点があげられる。それは、Religious Practice という用語を使う場合に、欧米のキリスト教の教会での「礼拝」と、日本の寺や神社での「参詣・参拝」には、その内容に大きな違いが見られるということである。前者が「決まった形式の、定期的な、集会的な (aggregate) 現象」であるのに対して、後者は「自由形式の、不定期な、私化・個人化された現象」である (真鍋、2010)。さらに、日本においては、かつては自宅に「神棚」や「仏壇」があることが普通であったという事情もある。つまり、日本においては、宗教性は「寺や神社に参詣・参拝する頻度」によっては捉えきれないものであるということである。

こうして、この質問項目——「あなたは、最近どの程度教会に行ったり、お寺や神社にお参りに行ったりしていますか」——は、日本人にとっては宗教性のレベルを捉える項目としては、何かしっくりこないものがあるといわなければならない。そして、まさにそのために、この質問項目の「因子負荷量」の値がやや小さくなっているというのが筆者の仮説である。

ところで、以上のような知見——宗教性を構成する諸要素のなかでの「教会・寺・神社へ行く頻度」という項目の特異性ともいべき傾向——は、何も「世界価値観調査」においてのみ見られるというものではない。じつは、この傾向は、「国際比較調査」の領域で、「世界価値観調査」とは双璧をなす「国際社会調査プログラム (International Social Survey Programme: ISSP)」のデータ分析においても確認されているものである (Jagodzinski と真鍋、2013)。つまり、今回のデータ分析におけるこの項目の因子負荷量は 0.534 という結果を示したが、「国際社会調査プログラム」の場合ではそれが 0.530 となっており、両者の数値はきわめて近いものとなっているということである。

ただ、今回の「世界価値観調査」の結果と、「国際社会調査プログラム」のそれとは、興味深い相違点も見られる。それは、欧米の宗教社会

学概念を用いるなら、Religious Practice のもう1つの要素とされてきた「問45 祈りの頻度」についての回答結果である。この場合は、今回のデータ分析での因子負荷量が、宗教性の6項目のなかで最大の0.774という数値を示したのに対して、「国際社会調査プログラム」では、それは「教会・寺・神社へ行く頻度」の場合と同程度の0.550という数値にとどまっている。

では、それは、なぜそうなのであろうか。この点について、まず、検討しなければならないのは、「時系列的な変化」ということである。「国際社会調査プログラム」は、調査時点が1998年、「世界価値観調査」のそれは2010年で、両者には12年の開きがある。つまり、この12年間に、「祈りの頻度」が変化したのではないかということである。そこで、この質問項目に対する回答結果——単純集計の結果——について検討した。しかし、これら2つの調査においては回答のカテゴリが異なるため、単純な比較は困難である。それでも、比較が全く不可能というわけではない。例えば、「祈りの頻度」を「週に数回以上」という回答で比べることは可能で、その場合、両者は26%で全く同じ数値となる。つまり、その数値で比べる限り、「時系列的な変化」は見られないということになるのである。

では、なぜ、因子負荷量に大きな違いが出てきたのであろうか。この点について、筆者の仮説は、以下のとおりである。それは、調査結果の%に違いは見られないものの、その意味内容に違いが出てきたというものである。では、その意味内容の変化がどのようなものかという点、それは、「祈り」という言葉の意味の一般化とでもいうべきものである。具体的には、例えば、人びとの日常生活の意識のなかでは、「あした、天気になあれ」というほどのものも、すでにして「祈り」という概念の内容に含まれるようになってきているということである。そして、このような意味での「やわらかい祈り」と、伝統的な意味での「かたい祈り」——カトリック的な意味でいうならば、「教会」のなかで「聖職者」が「一堂に会した信徒 (lay public)」に対して「宗教的儀式 (religious ceremony)」として行なう「制度化された (institutionalized)」 「祈り」ということになる——

とが、現代日本の宗教意識の状況のなかでは、取りたてて矛盾することもなく、共存しているのではないだろうか、というのが筆者の仮説である。

さて、以上の2つの質問項目——「問44 教会・寺・神社へ行く頻度」と「問45 祈りの頻度」——の含む意味内容をめぐる筆者の議論は、ここでの調査結果（つまり、知見）についての「解釈」というべきものであり、この分析の段階にあっては、どこまでも筆者の「仮説」ととどまるものである。そして、そのような仮説の検証のためには、さらなるデータ分析が必要となってくることは、いうまでもない。

3. 「クロンバックの α 係数 (Cronback's α)」による検討

以上の分析結果を踏まえて、最後にもう1つの検討の試みに移る。それは、信頼性係数の1つである「クロンバックの α 係数」による検討の試みである。

繰り返しになるが、本稿での問題関心は、「日本における宗教性は、どのような質問諸項目によって適切に捉えることができるであろうか、そして、それら質問諸項目間には、どのような関係の構造を見ることができようか」というものである。

そこで、「世界価値観調査」で尋ねられた宗教性に関する複数の質問項目間に「内的整合性」が確認されるとするならば、それらの諸項目は、「同一のもの」——つまり、「日本における宗教性」という同一のもの——を捉えている（測定している）と考えられるのである。そして、このような質問諸項目間の「内的整合性」の判断のためには、「信頼性係数」が利用される。信頼性係数としては、いろいろなものが開発されてきているが、本稿ではその最も代表的な「クロンバックの α 係数」を用いる。では、 α 係数がどのくらいの値であれば、「内的整合性」が確認できたといえるかという点については、一般に、0.7以上（しかし0.6以上で許容できる）という基準が用いられている（三輪、2007、渡邊、2012）。

今回の分析での「クロンバックの α 係数」は、0.8という値を示しており、したがって、ここで

の6項目については「内的整合性」が確認されたといえる。こうして、これらの6項目は、「日本における宗教性」という「同一のもの」を捉えている（測っている）と考えられるのである。

IV. おわりに

以上において、日本における宗教性を捉える（測定する）ための、6つの質問項目を選び出し、それら諸項目の相互間の関係の構造を、①相関マトリックス、②因子分析、③クロンバックの α 係数、といった3種類の統計的技法を用いて検討した。そして、その結果、6つの質問項目について、①それらの相互間の関係を示す相関係数はすべてプラスとなり、その値はかなり大きい、②それらから1つの共通因子が抽出される、③それらの内的整合性を示す信頼性係数は高いレベルにある、ということがわかった。

では、このような知見は、日本における宗教性の諸相とその構造の解明をめざした本研究にとって、どのような意義があるといえるであろうか。この点については、さまざまな議論があると考えられるが、ここでは、少なくとも以下の3つの点から、その意義について議論しておきたい。

1. 宗教性に関する質問諸項目の意味内容の探索

本稿では、「因子分析」の結果の解釈という形で、「問43 宗教を持っている」「問44 教会・寺・神社へ行く頻度」「問45 祈りの頻度」の3つの質問項目を取りあげ、それぞれの意味内容をめぐって若干の議論の展開を試みた。しかし、それも決して十分なものであったとはいえない。こうして、データ分析にさまざまな統計的技法を用いることをとおして、質問諸項目の意味内容を深く掘り下げて探索していくという方略を、さらに進めていくことが求められるのである。

2. 宗教性の国際比較のための「等価性」の検討とそれにもとづく「測度・指数・尺度」の構成

日本の宗教社会学においては、そして欧米の宗教社会学においても、「欧米と日本で宗教は大きく異なるので、その国際比較はほとんど不可能である」という考え方が主流であった。しかし、実

証科学的な考え方からするならば、それは、「できるか、できないか」という二分法的な問題ではなく、「どのような方法をとれば、何ができるか」という探索的な問題のはずである。こうして、宗教性の国際比較というテーマにとっても、それは、ある方法で比較することは困難であるにしても、別の方法で比較することは、不可能ではないということがありうる。このような可能性を示唆したのが、今回のデータ分析であった。つまり、「日本における宗教性」についても、以上のように、少なくとも6つの質問項目で捉える（測定する）限りにおいては、それを「欧米のキリスト教社会における宗教性」と国際比較するという試みも決して不可能ではないということである。いうまでもなく、これら6項目は、欧米社会においては、繰り返し、その measurement instrument としての有効性が確認されてきているものである（Jagodzinski と真鍋、2013 a、2013 b）。こうして、このような宗教性の6項目は、国際比較——少なくとも「日本」と「欧米のキリスト教社会」との国際比較——において、「測定の等価性」が示唆される質問項目であるといえるのである。

しかし、それと同時に、これら6項目が「世界価値観調査」で用いられた宗教性に関する20項目から、いわば「項目の絞り込み」ともいうべきプロセスを経て、選び出されたものであるということを確認しておくことは重要である。繰り返しになるが、そのようなプロセスは、以下の4段階の検討からなるものであった。

①回答者の30%以上が「わからない」とした項目は除外した。

②肯定的な回答者が10%未満の項目は除外した。

③項目の意味内容の検討から、「宗教的信頼に関する項目（問36(A))」と「宗教的寛容に関する項目（問9）」の2項目は除外した。

④相関係数の値の検討から、ほかの項目との相関が0.1台の低いレベルにとどまる項目（問42 人生の意味や目的について考える頻度）は除外した。

こうして、それら諸項目を絞り込むことによっ

て、「相互にプラスの相関が大きく」「1つの共通因子を持つ」「内的整合性の高い」6項目が抽出されたのである。そして、これら6項目は、日本における宗教性の「測度・指数・尺度」を構成するものであり、それをを用いた国際比較が可能となってくると考えられるのである。

しかし、以上は、「宗教性の国際比較」のための1つの方略ではあっても、それがすべてではない。例えば、質問項目に対する「わからない」という回答を手がかりとする国際比較の試みも、きわめて興味ぶかい課題であるといわなければならない。それが、宗教性の実証的研究における今後の重要な課題の1つとなるであろうことは間違いない。

3. 「測定モデル」から「因果モデルへ」

「宗教性の構造」の分析と、それにもとづく「測度・指数・尺度」の構成は、換言するならば、宗教性をめぐる「測定モデルの確認」と呼ばれる研究の側面である。「社会測定」の領域においては、それは、まさに実証的な研究の出発点を画する試みであるといわなければならない。

このような「測定モデルの確認」に焦点を合わせた研究は、それはそれで、きわめて重要な課題にアプローチする研究であるといえる。しかし、このような研究も、その成果を「因果モデル」のなかに位置づけることで、さらに有効な研究として発展させることができるのである。ここで、「さらに」という表現をとったが、それはいうまでもなく、「因果の法則」の発見・定立・累積こそが、科学と呼ばれる人間の知的営為の最終目標とされるものであるからにはほかならない。

じつは、このような方法論的な立場に立って、筆者は、宗教性を「原因変数」と「結果変数」の中心に位置づける「因果モデル」の構成を試みたことがある（真鍋、2011、2012）。ここでも、このようなアイデアの線上で、「因果モデル」を構想し、それを「世界価値観調査」のデータを用いて確認するデータ分析の試みが提案されることになる。これこそが、宗教性をめぐる今後の実証的研究の最も重要な課題の1つというべきものであろう。

文献

- 鮑戸弘 (1987). 『社会調査ハンドブック』日本経済新聞社.
- Almond, Gabriel A. and Verba, Sidney (1963). *The Civic Culture: Political Attitudes and Democracy in Five Nations*. Princeton University Press. (=1973, 石川一雄ほか訳「現代市民の政治文化」勁草書房.)
- Befu, Harumi (2006). 「欧米から見た日本の宗教」『関西学院大学社会学部紀要』第101号.
- Blalock, Hubert M. Jr. (1989). “Toward Cumulative Knowledge: Theoretical and Methodological Issues”. In H. Eulau (ed.) *Crossroads of Social Science*. Agathon Press.
- Glock, Charles Y. and Stark, Rodney (1965). *Religion and Society in Tension*. Rand McNally.
- Inglehart, Ronald (1990). *Culture Shift in Advanced Industrial Society*. Princeton University Press.
- Inglehart, Ronald (1997). *Modernization and Postmodernization*. Princeton University Press.
- Jagodzinski, Wolfgang と真鍋一史 (2015). 「ヨーロッパの国々における宗教と道徳の多元主義——理論的考察と実証的知見——」『関西学院大学社会学部紀要』第122号.
- 川端亮 (2016). 「宗教的信念における共通の因子——8カ国調査の結果から——」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』第42巻.
- Levy, Shlomit (1994). *Louis Guttman on Theory and Methodology: Selected Writings*. Dartmouth.
- Luckman, Thomas (1967). *The Invisible Religion*. Mcmillan. (=1976, 赤池憲昭ほか訳『見えない宗教』ヨルダン社.)
- 真鍋一史 (2010). 「欧米社会学における宗教理論と宗教調査」『関西学院大学先端社会研究所紀要』第4号.
- 真鍋一史 (2011). 「宗教性の諸相とその構造の国際比較——ISSP 2008 のデータ分析——」『関西学院大学社会学部紀要』第111号.
- 真鍋一史 (2012). 「宗教性の諸相とその構造の国際比較 (II) ——ISSP 2008 のデータ分析——」『関西学院大学社会学部紀要』第115号.
- 真鍋一史 (2016). 「日本における宗教性の諸相——『世界価値観調査』のデータ分析——」『青山スタンダード論集』第12号.
- 三輪哲 (2007). 「変数の合成と主成分分析」『SPSS による多変量解析』オーム社.
- Norris, Pippa and Inglehart, Ronald (2004). *Sacred and Secular*. Cambridge University Press.

Stark, Rodney and Finke, Roger (2000). *Acts of Faith : Explaining the Human Side of Religion*. University of California Press.

渡邊大輔 (2012). 「因子分析」『社会調査の応用』弘文堂.

和辻哲郎 (1979). 『古寺巡礼』(岩波文庫). 岩波書店.

柳川啓一 (1989). 『宗教とは何か』法藏館.

〈付記〉

本稿は、青山学院大学地球社会共生学研究センターにおける「国際比較調査のデータ分析」と題するプロジェクトの一環として執筆されたものである。プロジェクトのためのローデータは、世界価値観調査・日本代表の山崎聖子氏から提供された。また、データのコンピュータ処理については、北海道大学大学院博士課程の清水香基氏にお世話になった。ここに記して、心から感謝の意を表したい。

資料 データ分析に使用した「第6回世界価値観調査（日本調査）」の質問文

問1 次にあげるそれぞれが、あなたの生活にとってどの程度重要かをお知らせ下さい。

(1つずつ○印)

		非常に重要	やや重要	あまり重要ではない	全く重要ではない	わからない
A) 家族	→	1	2	3	4	9
B) 友人・知人	→	1	2	3	4	9
C) 余暇時間	→	1	2	3	4	9
D) 政治	→	1	2	3	4	9
E) 仕事	→	1	2	3	4	9
F) 宗教	→	1	2	3	4	9

問5 ここに、家庭で子どもに身につけさせることのできる性質が列記されています。この中で、あなたが特に大切だと思うものを5つあげて下さい。

(5つだけ○印)

1 自主性
2 勤勉さ
3 責任感
4 想像力・創作力
5 寛容性 (他人の立場・意見を尊重する)
6 節約心 (お金や物を大切にする)
7 決断力・忍耐力
8 信仰心
9 公正さ (利己的なふるまいをしない)
10 従順さ
11 自己表現力

問8 次にあげるいろいろな自発的な団体や組織それぞれについて、あなたがそうした団体に加わっているか、加わっていないかをお知らせ下さい。また活動しているか、していないかもお知らせ下さい。

(1つずつ0印)

		加わっており 実際に活動 している	加わっているが あまり活動して いない	加わっていない
A) 教会、宗教団体	→	1	2	9
B) スポーツ・レクリエーション団体	→	1	2	9
C) 芸術、音楽、教育団体	→	1	2	9
D) 労働組合	→	1	2	9
E) 政党	→	1	2	9
F) 環境保護団体	→	1	2	9
G) 同業者団体、職業団体	→	1	2	9
H) 慈善団体	→	1	2	9
I) 消費者団体	→	1	2	9
J) 自助グループ、相互援助グループ	→	1	2	9
K) その他の自発的(ボランティア)団体	→	1	2	9

問9 次にあげるような人々のうち、あなたが近所に住んでいて欲しくないのはどの人々ですか。

(1つずつ0印)

		近所に住んで いて欲しくない	近所に住んで いてもよい
A) 人種の異なる人々	→	1	2
B) 移民や外国人労働者	→	1	2
C) 宗教の異なる人々	→	1	2
D) 同棲カップル	→	1	2
E) ふだんから外国語を話す人々	→	1	2

問35 あなたは、次にあげるような人をどの程度信用しますか。「完全に信用する」

「やや信用する」「あまり信用しない」「全く信用しない」のいずれかでお答え下さい。

(1つずつ0印)

		完全に 信用する	やや 信用する	あまり 信用しない	全く 信用しない	わから ない
A) 家族	→	1	2	3	4	9
B) 隣人	→	1	2	3	4	9
C) 個人的な知り合い	→	1	2	3	4	9
D) 初対面の人	→	1	2	3	4	9
E) 自分とは異なる宗教の人	→	1	2	3	4	9
F) 自分とは異なる国籍の人	→	1	2	3	4	9

問 36 あなたは、次にあげる組織や制度をどの程度信頼しますか。「非常に信頼する」
 「やや信頼する」「あまり信頼しない」「全く信頼しない」のいずれかでお答え下さい。
 (1つずつ○印)

		非常に 信頼する	やや 信頼する	あまり 信頼しない	全く 信頼しない	わから ない
A) 宗教団体	→	1	2	3	4	9
B) 自衛隊	→	1	2	3	4	9
C) 新聞・雑誌	→	1	2	3	4	9
D) テレビ	→	1	2	3	4	9
E) 労働組合	→	1	2	3	4	9
F) 警察	→	1	2	3	4	9
G) 裁判所	→	1	2	3	4	9
H) 政府	→	1	2	3	4	9
I) 政党	→	1	2	3	4	9
J) 国会	→	1	2	3	4	9
K) 行政	→	1	2	3	4	9
L) 大学	→	1	2	3	4	9
M) 大企業	→	1	2	3	4	9
N) 銀行	→	1	2	3	4	9
O) 環境保護団体	→	1	2	3	4	9
P) 女性団体	→	1	2	3	4	9
Q) 慈善団体	→	1	2	3	4	9
R) APEC (アジア太平洋経済協力会議)	→	1	2	3	4	9
S) 国連	→	1	2	3	4	9

問 42 あなたは、人生の意味や目的について考えることがどのくらいありますか。
 (1つだけ○印)

- | |
|---|
| 1 しばしばある
2 ときどきある
3 ほとんどない
4 全くない
9 わからない |
|---|

問 43 あなたは、現在、何か宗教をお持ちですか。次の中から1つだけあげてください。

(1つだけ○印)

- | | |
|---|-------------------|
| 0 | 持っていない |
| 1 | キリスト教 (ローマ・カトリック) |
| 2 | キリスト教 (プロテスタント) |
| 3 | キリスト教 (その他) |
| 4 | ユダヤ教 |
| 5 | イスラム教 |
| 6 | ヒンズー教 |
| 7 | 仏教 |
| 8 | その他の宗教 (具体的に) |
| 9 | わからない |

問 44 冠婚葬祭は別として、あなたは最近どの程度教会に行ったり、お寺や神社にお参りに行ったりしていますか。

(1つだけ○印)

- | | |
|---|----------|
| 1 | 週に2回以上 |
| 2 | 週に1回 |
| 3 | 月に1回 |
| 4 | 特別な日のみ |
| 5 | 年に1回 |
| 6 | ほとんど行かない |
| 7 | 全く行かない |

問 45 冠婚葬祭は別として、あなたはどの程度お祈りをしますか。

(1つだけ○印)

- | | |
|---|---------------|
| 1 | 1日に数回 |
| 2 | 1日に1回 |
| 3 | 週に数回 |
| 4 | 宗教行事に参加するときだけ |
| 5 | 特別な日のみ |
| 6 | 1年に1回 |
| 7 | ほとんどしない |
| 8 | 全くしない |

問 46 宗教的な儀礼に出席しているかどうかは別として、あなたはご自分を信心深いと思えますか、それともそうは思いませんか。

(1つだけ○印)

- | | |
|---|------------------|
| 1 | 信心深い |
| 2 | 信心深くはない |
| 3 | 無神論者である (神は信じない) |
| 9 | わからない |

問 47 あなたは次にあげるものの存在を信じますか。

(1つずつ○印)

		信じる	信じない	わからない
神	→	1	2	9
地 獄	→	1	2	9

問 48 次にあげる2つの意見のうち、あなたの意見はどちらにより近いですか。

(1つだけ○印)

1	宗教の基本的意義とは、宗教戒律や儀式に従うことである
2	宗教の基本的意義とは、他人のために善行をすることである
9	わからない

問 49 次にあげる2つの意見のうち、あなたの意見はどちらにより近いですか。

(1つだけ○印)

1	宗教の基本的意義とは、死後を意味のあるものにする事である
2	宗教の基本的意義とは、現世を意味のあるものにする事である
9	わからない

問 50 あなたの生活にとって神はどの程度重要ですか。「1」は「全く重要でない」を、また「10」は「非常に重要」を示すとします。1から10までの数字で当てはまるものを1つお答え下さい。

(1つだけ○印)

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

[全く重要でない]

[非常に重要]

99 わからない

問 51 次にあげる意見について、あなたはどの程度賛成ですか、それとも反対ですか。

(1つずつ○印)

		強く 賛成	賛成	反対	強く 反対	わか ら ない
A) 科学と宗教が対立する場合、正しいのはいつも宗教だ	→	1	2	3	4	9
B) 受け入れられる唯一の宗教は、私の信じる宗教だ	→	1	2	3	4	9
C) 公立学校では、全ての宗教について教えるべきだ	→	1	2	3	4	9
D) 他の宗教の信者も、恐らく私の信じる宗教の信者と同じくらい道徳的だ	→	1	2	3	4	9

The Various Aspects and Structure of Japanese Religiosity: Data Analysis of the WVS 6th Wave

ABSTRACT

Does a “measure / index / scale” of religiosity developed in western Christian societies have more or less the same reliability in Japanese society? I attempt to answer this question by conducting a data analysis of the World Values Survey (WVS) 6th wave data.

As the methods of survey data analysis, “descriptive analysis”, “conditional analysis” and “structural analysis” have been developed. In this paper, I focus on a “structural analysis” of six question items regarding the Japanese religiosity asked in the WVS.

What kinds of statistical methods, then, can be used to conduct a “structural analysis”? The statistical methods used for such data analysis are as follows:

1. correlation matrix
2. factor analysis
3. Cronbach's α

The results of these data analyses show that six question items asked in the WVS could construct a “measure / index / scale” of Japanese religiosity, and it would be suited for the cross-national comparison with western Christian societies.

Key words: structure of religiosity, World Values Survey, data analysis, correlation matrix, factor analysis, Cronbach's α